

# 右翼労戦統一を粉砕しよう！



## 動労千葉

### 定期大会

1988.9.27  
No. 2098

### の成功を勝ち取る

国鉄千葉動力車労働組合  
千葉市要町二一八（動力車会館）  
（鉄電）二九三五～六（公衆）〇四七二（七）七二〇七

総評は今夏七月二六～二八日の三日間にわたって、「最後の総評大会」とも言うべき「八九年総評解散」を決定した大会を開催した。

このことにより、昨年十一月の「連合」結成から、八九年秋の全的統一の動きは既定のもののように進行しているかのように見えている。

「反撃ははじまった！」

しかし八九年秋への全的統一の過程が「平坦」なものだろうか。その答えは「NO！」である。なぜならば総評を底辺で支えてきた良心的現場労働者の闘争性と背骨は未だ折られず、方針と指導さえ与えられればすぐにでも反撃にうつってでるだけの力を持ちあわせているからである。

すでに都労連、都高教組の「連合」との統一反対の決定、沖繩高教組の分離・独立と反撃の闘いは開始されている。

わが国鉄を始め、自治労、全通、日教組などの官公労の本格的な動きはこれからであり、流動化が必至な状況だ。特に国鉄をめぐる動きは重要だ。

なぜならば、日帝中曾根・竹下は、「戦後政治の総決算」の名のもとに「人と金と物」を大動員して総評労働運動の手中であった国鉄労働運動破壊のために集中攻撃をかけてきた。その結果「分割・民営化」は強行されたのだ。

だがしかし、中曾根の最重要課題であった国鉄労働運動の破壊は、基本的に失敗してしまったのだ。国労四万が動労総連合が、そしてなによりも清算事業団五〇〇〇名の仲間たちの存在そのものがその証である。このことにより九〇年三月の清算事業団問題は政治焦点化、社会問題化へ転化する可能性を大にしているのであり、八九年秋の労働運動めぐる闘いと流動化との結合が待ちとられるならば一挙に情勢は切り拓かれるのである。

右翼異労力戦は戦争への道

ところで、右翼労戦統一について、このことが民社・同盟に対する総評の敗北同盟・JC主導の「連合」への屈服のように語られているが、その見方は間違っている。右翼労戦統一の問題は、労働運動の左右の勢力争いなどでは断じてないのである。あるのは、日帝の戦後労働運動破壊への屈服ということであり、軍事大国化、産業報国会化攻撃への全面降伏ということである。

こうした情勢のもとで見えておこななくてはならないことは、日共・統一労組懇の火事場泥棒的な介入と総評解体にむけた反動的役割である。国労西日本本部（日共・革同主導）の出向協定への裏切り締結、国労ストライキの返上と敵対等々に示されるように、この間、日共・統一労組懇は、日帝・資本とは全く闘わず、労働者の闘い（ストライキ）には目の色をかえて反対するといった勢力として、急激に反動化してきている。

また、動労革マル・鉄道労連にいたっては、「大東亜共栄権が必要」「日の丸労働運動」「JRP党（自民党支持）」を絶叫し、文字通りの日帝の忠犬番犬としての大役を十二分に演じ、より純化したファシストとして、その醜い姿を労働者の前にさらしている。

いずれにしても、社共の無力化と革マルの反動化・反革命化の動きの中で始まっている右翼労戦統一の流れに対して、われわれのとるべき態度は明らかである。「連合」反対！「統一労組懇」反対！の真に闘う労働組合の結集をめざし闘うことであり、まずは職場において実力で資本・会社の組合解体攻撃と闘い、三里塚をはじめとする反戦・政治闘争を闘っていく労働運動の拡大・発展をかちとるということである。